韓国高校野球の現状と海外合宿の状況について

・高校（チーム）数及び選手数の状況

〇2023年6月30日現在、高校チームは94チーム
　選手数の状況は、1年生：1,440人、2年生：1,206人、3年生：1,009人、合計：3,655人
（韓国野球ソフトボール協会）korea-baseball.com

・高校対抗リーグ戦、トーナメント戦等の状況（強豪校と呼ばれるチームの状況）

〇高校対抗リーグについて
　「高校野球週末リーグ：2011年から新たに再編された高校野球大会」
　2010年10月26日に教育科学技術部・文化体育観光部・大韓野球協会が「勉強する運動選手という」キャッチフレーズで、「高校野球週末リーグ推進計画」を発表した。これは、既存の高校野球トーナメントが平日に開かれ、選手たちの学習権を侵害するという世論を反映したもの。
　また、プロ野球に後れを取り、人気を失いつつある高校野球の復興にも役立つと判断。
土・日・祝日、夏・冬休みシーズンに圏域別に分けて週末リーグ、前・後半期の王中王戦を実施。

〇トーナメント戦などの状況について
　高校野球週末リーグを導入する前までは9つの大会があった。そのうち、ソウルで開催された青龍旗、黄金獅子旗、大統領杯、鳳凰旗の4大会は「4大高校野球大会」と呼ばれていた。

①青龍旗全国高校野球選手権大会（「高校野球週末リーグ」後半期王中王戦）
　1946年から大韓野球協会と朝鮮日報の共同主催で開催。高校野球週末リーグがスタートしてからは、後半期の王中王戦大会として開かれている。

②黄金獅子旗全国高校野球大会（「高校野球週末リーグ」前半期王中王戦）
　1947年から大韓野球協会と東亜日報の共同主催で開催。地域予選を経たチームと成績優秀チームを招待していたが、2008年からはすべての高校チームが参加可能となった。高校野球週末リーグがスタートしてからは、前半期の王中王戦大会として開かれている。

③大統領杯全国高校野球大会
　1967年から大韓野球協会と中央日報の共同主催で開催。高校野球週末リーグ時代になった後も現存する4大会のうちの一つ。

④鳳凰大旗全国高校野球大会
　1971年から大韓野球協会と韓国日報の共同主催で開催。地域予選なしで全国の高校野球チームが参加する方式で、一時は在日韓国人チームも招待されていた。2011年、高校野球週末リーグの施行をきっかけに廃止され、社会人野球大会に名称を変更し継続してきたが、2013年から元のタイトルに戻り復活した。

⑤新世界Eマート杯全国高校野球大会（大韓野球協会長旗）

2013年、大韓野球協会長旗全国高校野球大会という名前で新設。しかし、2016年には大韓野球協会の管理団体指定問題の影響で中止、また2017年には教育部の「全国大会参加回数遵守」指針により開催中止となっていた。2018年から団体統合に伴い大韓野球ソフトボール協会長旗として再開された。

2021年6月21日に大韓野球ソフトボール協会が新世界グループのEマートと業務協約をしたことにより、2022年から新世界Eマート杯に変更され、全国の高校野球チームが参加する大会に変わった。

⑥「全国体育大会」野球高等部

大韓体育会が直接主管し、各市道の代表で1チームずつ参加する。2008年までは他の大会とは違って、9回裏まで勝負が決まらない場合は抽選で勝者を決めていたが、2009年からタイブレーク（無死、一・二塁）での延長戦を行っている。

〇トーナメント戦の構成について

2013年までの圏域別構成を見ると、ソウル地域の14チームが7チームずつA・Bに分かれており、京畿道が単一圏、仁川広域市と江原道が一つの圏になっていた。大田広域市・忠清道圏のチームは「中部圏」、光州広域市をはじめとする湖南地域のチームは「全羅圏」に分類された。「慶尚圏」はAとBに分かれ、Aは釜山広域市・蔚山広域市・済州地域のチームが、Bは大邱広域市・慶尚道地域のチームが属することになった。

後半期に入っては、ソウル、京畿道、江原道、仁川広域市、全羅道・中部地域、慶尚道の4広域圏に分け、本来のグループではない同じ広域地域の他グループの学校と試合を行った。

2020年シーズンの場合、新型コロナウイルスによる日程の延期で、6月11日の黄金獅子旗を皮切りに幕を開けた。この過程で週末リーグの前半期と後半期の間に全国大会が重なってしまったほか、週末リーグの順位によって参加可否が決まる大会もあり、ランダムで対戦表を抽選する事態も起きた。

（参考）第78回青龍旗全国高校野球選手権大会の対戦表と日程（2023.06.20）
https://blog.naver.com/synabro68/223134246024

〇メジャー全国大会(優勝記録)について

「大統領杯・青龍旗・黄金獅子旗・鳳凰旗」が高校野球の4大メジャー全国大会と呼ばれてきたが、2013年から協会長旗(現在の新世界Eマート杯)が追加された。

・4大メジャー大会をすべて優勝した学校は、13校。（2023年時点、括弧は達成年度）

慶北高校(1971)、大邱上原高校(1973)、群山商業高校(1982)、光州第一高校(1983)、北一高校(2002)、光州東城高校(2003)、徳寿高校(2008)、ソウル高校(2014)、徽文高校(2014)、東山高校(2016)、仁川高校(2020)、忠岩高校(2021)、釜山高校(2023)」

・協会長旗(Eマート杯)を含めた5大メジャー大会をすべて優勝した学校は、４校(2023年時点)

徳寿高校(2013)、東山高校(2016)、ソウル高校(2018)、北一高校(2022)

・韓国国内における高校野球の認知度、人気の状況

〇韓国の高校野球大会は、1946年の「全国中等学校野球選手権大会」を初めに、新聞社の主催で始まった。1960年代には、準決勝や決勝戦が休日に開かれ、大半の観客席が埋まるくらいであったが、国民の生活水準がある程度上がり始めた1970年頃からは韓国最高の人気スポーツの仲間入りすることになる。

その当時は、大会のスタートと同時にソウル運動場の野球場がほとんど満員となり、準々決勝戦からはチケットが売り切れになるほど超人気コンテンツになった。産業化による向都離村の現象が著しく、全国各地から故郷を離れソウルに上京した地方出身のファンが愛校心と地元愛で団結し大盛況だった。その熱気は、韓国プロ野球誕生の原動力となった。

しかし、皮肉なことに1982年に韓国プロ野球が発足して以来、高校野球の人気は急激に下がった。毎試合、東大門球場に集まっていた大観衆は、いつのまにかソウルの蚕室（チャムシル）野球場と地元チームのプロ野球チームの試合がある競技場に向かい、高校野球競技場の観客席には各学校の年配の先輩らや選手たちの保護者、動員された在学生応援団以外はほとんど訪れないリーグに転落した。NPB創設後も甲子園本大会が依然として全国的な人気を集めている日本とは全く違う状況になっている。

2000年代に入ってからは、プロ野球チームで高校選手中心にドラフト指名を行い始め、有望株などを中心に少し関心が上がるようになったとはいえ、まだ人気を取り戻したと言える段階ではなく、高校野球はテレビ中継もしていない状況である。

・卒業生の進路状況

〇多くの高校野球選手がプロ入りする過程では明るい面だけが注目されえているが、実はその裏面は暗い。高校野球系が暗い大きい理由は、韓国の高校野球は趣味で楽しむ生活野球ではなく、大学進学やプロ野球への進出が目的のエリートスポーツだからだ。

毎年高校や大学の卒業予定者など、数百人が新人ドラフトに参加しているが、その中から選ばれる人数はいくら多くても110人で、実際に選ばれる割合は参加数の12%余り。高卒選手だけに限定した場合も似たような割合である。

ドラフトで選ばれなかった場合は、育成選手として入団する方法もあるが、プロ選手のチャンスをつかむのは難しく、大多数は1～2年以内に放出される。しかも、ドラフトで選ばれた選手も1試合もプレーできなかったり、1～2試合しか経験できなかったりしたあと放出されることが多い。

新人ドラフトに選ばれなかった選手たちは、大学に入って4年間技術を磨き、再びドラフトに出る。ところが、大学も該当学校が指名する形で入学するため、希望する大学に進学できない場合もある。また、ソウル・首都圏と地方の大学間の実力差が多少ある。2年制の短期大学に進学する選手もいるが、高卒や4年制大学出身に比べるとプロ野球への進出可能性はかなり低い。

・高校野球を統括する団体（大韓幼少年野球連盟）の活動状況

〇大韓幼少年野球連盟は、韓国を代表する幼少年野球団体。エリート選手の育成中心ではなく、野球を愛する青少年が思う存分運動できる環境を支援する団体

○現在、高校野球を総括する団体は「大韓野球ソフトボール協会（KBSA）」
（HP）http://www.korea-baseball.com/

○大韓野球協会は、1953年に発足して以来、1954年にはアジア野球連盟に加入、1968年8月には国際アマチュア野球連盟に加入した。毎年全国体育大会に参加する一方、全国選手権大会を開催する。国内野球選手のアマチュア資格の審査は、同協会の固有権限であり、各市･道地域に支部を設置している。

1971年1月31日に、大韓野球協会と大韓軟式野球協会が統合され、2003年12月30日に社団法人化された。2016年6月29日には、大韓ソフトボール協会、国民生活全国野球連合会と統合して大韓野球ソフトボール協会が発足し、大韓野球協会という名前は60年の歴史を残したまま消えることになった。

2011年から新しく再編された高校野球大会は、2011年から2015年までは大韓野球協会が主管していたが、大韓野球協会の不正などが内部告発を通じて知られ、2016年から大韓体育会の管理団体として指定された。

こういった影響で、高校野球週末リーグの運営主体も大韓野球協会からKBO(韓国野球委員会)に変更され、文化体育観光部が補助する週末リーグの予算(約20億ウォン)もKBOに送られた。また、大韓野球協会長期全国高校野球大会と大韓野球協会長杯全国大学野球大会も中止となり、2017年1月16日に管理団体から解除された。

・海外合宿の状況（国別及び日本の都道府県）
・海外合宿の際の企画運営方法について
・受け入れの際に配慮が必要な点等
・海外合宿の際の期間や施設等に対する要望や需要

※以上の4つの項目は、韓国野球ソフトボール協会にお問い合わせした結果（2023.7.21）、各学校固有の決定事項ということで、詳細現状については把握しかねるとのこと。協会が定めている規定・指針をもとに、監督が高校の事情に合わせて決める。

【合宿訓練規定】
○冬季訓練による負傷を防ぐために１１月～１２月は国内外での合宿訓練、親善・練習試合などを禁止している。１月１１日から開始可能で、国内外合宿は最長３５日以内で定めている。
○コロナ過では、主に国内での合宿が多かったが、今年に入って日本やフィリピン、アメリカまで合宿訓練に行く学校が増えてきた。
○合宿の企画や運営全般にわたって監督の権限が強いし、平均500万ウォンから最多１千万ウォン程度の費用が掛かるため、親の費用負担が大きいという懸念の声が高い。